

# 対談 なぜ、いま、「幸福感」なのか？

近代的経済システムを支えられた高度経済成長期を過ぎた先進国では、次なるステップとして、国や地域、住む人々の多様性が反映された持続的な社会の追求——社会の質の向上を目指すべき時代が到来している。こうした社会において、豊かさを計るための新たな切り口として注目されているのが「幸福感」だ。人々の幸福感に注目した地域づくりが、世界的にも日本国内でも始まっていることをふまえ、幸福感を指標とすることの意義と重要性について考えてみたい。

ホートレイト撮影・堀出恒夫

関西大学教授

草郷 孝好

ノートルダム清心女子大学教授

豊田 尚吾

## 幸福度に注目する社会的背景

**豊田** 高度経済成長を経て物質的豊かさはある程度満たされたといえる今、心の豊かさを求める人が増えているようです。2011（平成23）年の内閣府の調査でも、約30年前と比べて、物の豊かさを求める人が約10%減じたのに対して、心の豊かさを重視すると答えた人は約1.5倍になったとの報告があります（\*1）。そのため、今回の特集では、幸福感という視点に今注目すべき意義があるのか、特に「地域としての幸せ」をどう捉えるかを情報発信できればと思っております。草郷さんは、愛知県長久手市をはじめ、地域の方々と「幸せのモノサシづくり」に取り組んでおられますが、こういった問題意識から幸せというものを重視されているのでしょうか。

**草郷** 私も豊田さんも勉強してきた経済学は、物質的な豊かさの追求という面で貢献し、日本では高度経済成長を遂げ、そして1人あたりの所得も上がりました。けれど、アメリカの経済学者リチャード・イ

ースタリンが「経済成長し続けること＝必ずしも幸福感が高まるということではない」（「イースタリンのパラドックス」と唱えたように、日本でも1970年代以降、GDPは増えても幸福度は高まっていなるとのデータが内閣府の国民生活白書（2008年）で示されました。現実には、いまだに経済成長こそ重要という考えに縛られていて、なかなか舵の切りかえができていない。それをきちんと切りかえるために、ひとりひとりが「自分たちが手に入れた経済資源をどう生かすのか」ということに真剣に取り組むべきであって、「どういう地域で暮らせるなら自分が幸せになれるのか」と問いかけることで社会の方向性が見えてくるのではないかと考えています。「幸せ」というキーワードは経済学者や研究者のためというよりも、市民自身が自分の生活を振り返るために欠かせない大切なひとつの切り口になると思います。

**豊田** 物質的な豊かさはある程度水準まで行ったが、市場競争やグローバル化を考えれば、今の豊かさを維持するためには、まだまだ経

（\*1）「国民生活に関する世論調査」平成23年10月調査報告書（内閣府）。

済発展を求め続けなければいけない、という見方もあります。

**草郷** 「社会の質重視への方向転換」——多様な市民を生かして、どういう社会をつくりあげるべきか、その実現には、どんな経済や社会システムが望ましくて、どのレベルの経済成長が必要なのかという議論が、まずは必要だと思います。でもそれをせずに、頭ごなしに経済成長が何%なければ社会は窮乏化していくとか、低成長社会には先がないんだという言い方は、ちょっと論拠に欠けると思います。成長の果実をどう生かすのか、誰のために、そして誰がそれを考えるべきか、を考えることがとても重要なのです。

日本あるいは先進国が取り組むべきは、地域の多様性を反映した資本主義経済とか経済市場システムを果たして実現できるのかどうか、というチャレンジ。それに向かっていかないと、おそらく、幸福感が高い人の数も増えていかないと、強い閉塞感を漂わせていくと思います。個人がもつとつと自分の住む地域社会に向き合って、社会の質のカタチを創るチャンスが、ここ10

15年の間にやっと到来してきたなと思っています。



Kusago Takayoshi

Toyota Shogo

「幸せ」というキーワードは、市民自身が自分の生活を振り返るために欠かせない大切なひとつの切り口。

欠かせない要素は何か」が徐々に実証されてきている点です。課題は、「幸福」というかなり個人差のある主観的なものに国や行政が関与することで、それをある型にはめることになるんじゃないかという危険性。これは、幸福の指標や幸福についてのデータを、誰が何のために使おうとしているかに左右されやすい。だから、政府や行政は、決して、幸せ指標を画一したり、おしついたりしてはいけません。指標やデータの選択は、政府ではなく、その国の市民の意思決定に委ねなければなりません。

## 世界的レベルから地域まで——「幸福感の指標」づくり

**豊田** OECDが、経済成長に偏重した指標群だけでは社会生活の改善具合や社会の進歩状況を幅広く把握できないので、これまでにない指標群が必要だ、と問題提起をしました。国連の「人間開発指数」や

**豊田** 幸せ指標というと、どの国が1位かといったランキングについて目が行きがちです。そのような他者との相対的なポジションで幸せが決まるのではなく、あくまで市民の選択によって自分たちがどういう状況にあるのか絶対的に評価できるような指標をつくることは、とても意味があると思います。特に、過去や未来の自分たちと比べるものさしとして使えるのが、とてもいい。一方で、そのインデックスが対象とする範囲をどうやって設定していくのかということも大きな課題ではないでしょうか。例えば世界、国、県、コミュニティ、さまざま

なレベルであってもいいのかもしれませんが。

**草郷** 日本を含め先進国では、GDPなどの経済データは、国、都道府県、地域単位で積み上げられ、それらは同じデータとして構造化、分析できる。でも幸福に関するデータについては、地域の持つ文化の違いなどによってその感じ方等が変わるわけで、幸福の指標の枠組みや扱い方にも地域ごとに違いがあるのは当然です。日本の「幸せリーグ」は、それを意識して、地域の特徴を活かした幸せな地域づくりに取り組んでいると思います。

**豊田** 幸せリーグは、2013年に設立された、住民の幸福実感向上を目指す約60の基礎自治体の連合ですね。この動きに草郷さんはどう関わって、どう評価されていますか。



Kusago Takayoshi

**草郷** 私はおもに、リーグ設立時からメンバーである愛知県長久手市と関わってきました。長久手の市長は、市の運営にもっと住民がかかわらないといけない、地域をつくるのは住民で、住民が動けるように市長も一生懸命サポートをする、という考え。私はそれに賛同して協働活動を展開しているわけです。

**豊田** どこに住むかということと、どうウェルビーイングを実現できるかは、大変関係が深いものです。ただ、自分自身振り返って考えると、教育とか自然とか治安などの環境を、ウェルビーイングを実現するための「条件」として見ることはありました。しかし、自分が地域にどうコミットし、場合によっては地域の幸福度を上げるためにどう貢献できるのかといった、自らの能動的な関わりを考えることはなかなかなかったように思います。

そのため、例えばワークショップのような形で、地域をどうするか人と意見を交わすことは、「どうやって民主的に自分たちの幸せ指標をつくるのか」という試みとしてすごく面白いと思います。幸せリーグで

ながる。

「自分にすぐにはね返ってこない利得だけけど、それが誰かのためになる」という利他の価値はすごく大事なのですが、従来の経済学では十分に検討されていないんです。でも、その部分にも研究対象を広げるべきで、すでにそういう作業が始まっているのは、これからが楽しみです。

**豊田** 幸福を客観的なデータとして扱い、計量分析のような形でアプローチすることにも意味がある。一方で、それだけでは全体を捉え切れないというある種謙虚な姿勢で、ワークショップなどオーラルなコミュニケーションを通じ、個々の話を聞くなかでストーリーを紡ぐような創発を試みる方法もある。そんな多様な取り組みかたが持てる分野ですね。

**草郷** 今、豊田さんが言われたように、インタビュアーやワークショップで丁寧に人々の声を拾っていくことで、研究者には、ひとつひとつのデータには生きる人々の息吹や生活実感が込められているというところを感じてほしいです。

**豊田** 話が変わりますが、最近、トマ・ピケティの『21世紀の資本』という本が話題になっています。大まかにいうと、資本主義の帰結として格差が広がるのは、ある種長い目で見て必然だ、といった問題提起をしていますね。学術的な評価はひとまずおいて、幸せや地域での指標づくりと、ピケティの問題提起に、何か関わりを見つけておられるでしょうか。

**草郷** この本は、一説によるとフランス語より英語版が爆発的に売れたようです。格差というものがその社会にとっての病——いわば痛みみたいなもので、それが今よりもっと深刻になっていくことへの危機感がアメリカ社会の根底にあって、それによってブームがさらに広がったと思います。幸せというもののさしによって社会のあり方を変えて

グでの方法論はどうですか。

**草郷** リーグの中に「幸せの指標を地方自治体レベルでどうつくるのか」を考える分科会があります。ここであるとき、地域単位で幸福度の測定をするために共通の質問票をつくるという動きがあったのですが、私は簡便な雛形をつくることには反対でした。個々の地域の取り組みを評価したり、どういう地域でありたいかという議論には、行政が市民よりも先走ってしまつたらダメなんです。市民のやる気を引き出すために、分科会の主要メンバーである長久手市では、「みんなデータを集め、みんなで考え分析する」ことを掲げて「幸せのモノサシづくり」をしています。そして、幸せリーグなどで、長久手市の事例をみんながシェアする

ローカライズ——  
地域自治が進むような形で  
地域・地方の発展・  
創生が起きれば良いと  
思います。

という形をとって、他の自治体にも伝わっていけば、市民が自分で動かなきゃという気持ちになるのではと期待しています。

## 幸福感について 研究し取り組む 意義

**豊田** 経済的な指標以外の考え方として幸福感を取り上げる意義はあると思いますが、一方で、科学知が、どこまで幸福にアプローチできるのか、という議論もあると思います。

**草郷** 幸福の研究は極めて学際的。今は、経済学者も心理学あるいは脳科学の知見を積極的に取り入れています。例えば、アメリカの経済学者ポール・ザックは、血液検査による実証研究を積み重ねて、オキシトシンというたんぱく質ホルモンが分泌されると人々は非常に幸せ感が高めるらしい、さらにそれが分泌されるときは利他性が高いときだと言っています。利他こそ人々の幸せに欠かせないものだという考え方は、「マズローの5段階説」(\*2)や、さらに昔のアリストテレスが「エウダイモニア(最高善)」と呼んだ最高に幸せな状態にもつ

いかなければならないという点と密接に関係しているように見え、ピケティ登場のタイミングと、幸福論の広がりに関わり合っているのではないかなと考えています。

## 地域としての幸福、 地域づくりを考える

**豊田** 幸福という概念をさらに生き生きとした存在に変えていくためのキーワードが、今回の特集のもうひとつの切り口である「地域」ではないかと思っています。草郷さんは長久手市や熊本県水俣市など、地域の幸せに非常に関心を持って取り組まれています。個人の幸せだけではなく、地域というものも

ワークショップのような形で  
地域をどうするか  
人と意見を交わすことは、  
試みとしてすごく  
面白いと思います。



Toyota Shogo

を含めて幸せを考えるべきと思われる理由は何でしょうか。  
**草郷** なぜ地域社会の枠組みにこだわるかというと、「社会と個人との関係性の見方」を変えなければいけないという思いがあるからです。

例えば水俣からは、住民に向き合うように行政のあり方が変わっていったことで、住民自身もどんどん変わっていったことを学びました。水俣病患者の個人的な大変な苦勞が語られることが多いけれど、水俣はその地域社会そのものがいったん壊れたと言ってもいい。補償金をめぐり住民間でもめごとが生まれるなど、水俣病が起きたことによって地域内で疑心暗鬼、反目し合うような状態になったわけです。そういう経験をして、水俣は1990年以降、大きく地域再生への歩みを始めた。いったん崩壊したところから、水俣に暮らしている人たち自身が、どういう地域でありたいかを問いはじめ、市の行政も水俣病の患者を特別視せず、一市民として向き合うようになった。そして地域の将来ビジョンづくりのために、市役所あるいは市民はどんな協力ができるかを対話によ

(\*2) アメリカの心理学者 A・H・マズローが唱えた、人間の欲求が 1. 生理的欲求 2. 安全の欲求 3. 社会的欲求 4. 自我欲求 5. 自己実現欲求の 5 段階からなり、次第に高次元の欲求充足にニーズが進むとする説。

って進めるとい方向に転換してきました。それから、1992年にリオ・デ・ジャネイロで開催された「地球サミット」で、水俣の悲劇を紹介した際、ブラジル人の新聞記者にブラジルで森林伐採をする日本企業のことを指摘され、後に水俣市長になる人は「水俣は環境にやさしいまちに生まれ変わるとい姿を見せなければ、世界は水俣を認めてくれない」とその場で決意、市の行政を変えていくことに強い覚悟ができた。そして、今では、水俣は世界に向けて環境と共存するまちであるというメッセージを十分発信できる環境モデル都市になっているのです。

最近、個人的に「社会発酵論」というものを考えています。社会、地域というのは土。その土の中で生活するいろいろな生物のひとつが人間で、人間も、土を生かし、土の質をよりよ

## 草郷 孝好

くさこうたかよし／関西大学社会学部教授。東京大学経済学部卒業。スタンフォード大学大学院修士課程、ウィスコンシン大学マディソン校大学院博士課程修了。明治学院大学、北海道大学、大阪大学を経て2009年から現職。

2001～2003年、国連開発計画上級政策アドバイザー。著書に「GNH(国民総幸福)・・・みんなで作る幸せ社会」(共著)など。



Kusago Takahiro

**若者や女性と地域の幸せ**  
**豊田** 地域を支えるうえで、若い人たちへの期待がありますが、どのようなことを考えていくべきでしょうか。  
**草郷** 田舎や地方に関心を持っている若い人たちが増えているのが面白い。ぜひ、い

**草郷** 地方創生の意味は、私の解釈では、幸せを大切にしている地域を創生すること。なにより重要なのは、そこで生活している人々が自ずから活性化し、自分たちが今住んでいる地域で生きること意義や喜びを見出せる場にしていく、そうなること、すごくいい「土」(＝地域社会)になる。でも、今、地方創生って、地方間の競争によって活性化、

みたいな言われ方をしていませんか。短期間でうまくいくかいかで地方を選別するんじゃない、地方同士でどう高めあっているのかという観点から進めていくことが大事だと思う。経済的に豊かになれば創生するかというと、多分それでは早晚失敗するでしょう。もともと社会が持っている文化や地域性を、なんとか今必要とされているものに変えていくことをしないと、創生したものが長続きする保証はな

それがいわゆる市場経済に入ることしか意味しないように理解されがちです。もちろんそれをキャリアとして重視するのもいいし、家庭を重視するのもいいし、それぞれの可能性や価値観で判断できるような社会が、幸せな社会につながるのでは、と思います。

**草郷** 男性の分担はこれ、女性の分担はこれ、というふうに捉える人がいることにも、ちょっと注意をおきたいですね。これまでの社会では、分業することで効率的に経済成長のシステムが保たれましたが、すでに社会の質を高めるとい次のステップに入っているとしたら、世代・性別ではなく、それぞれの価値基準に基づいて自分の可能性がきちんと活用されなければならない。若い人たちがそういう価値観を共有できていると思うので、社会に出たときにその価値観が潰されず、むしろそれが柱になっていく方がいいのではないのでしょうか。

Toyota Shogo

## 「幸福感」を未来に生かすうえで

**豊田** ある学会で、「0から10までの間で、どのぐらいの幸せが一番いいと思いますか

と質問した結果、8ぐらいが一番いいという答えが多かった」という発表がありました。今までの経済学では、最大、極大がベストという考え方をしてきました。幸福というものは、それをゴールとして設定して、まっしぐらに突き進むというものではない。幸福という視点でいろいろなものを考えたり、それを基準に実践をしたりすることで、結果的に、それこそ8ぐらいの幸せが一番心地よいと感じる、そんな存在なのかもしれないなと思ったことがありました。

そういった意味で、地域での幸せも本当に多様で、いろいろな人がいろいろな幸せ観を持っているなかで折り合いをつける作業も必要に



いんじゃないかと思っています。「地域の中に価値がある」といったときに、それを生かすために何が必要かといったら、やはり人だと思っています。そのため、さまざまな経験や技能を持った人がいるような地域にいることはとてもよいことなのです。幸せを大切にしている地域社会とは、個性を持つ社会のこと。もしその個性に興味や関心を持つ人が出てきたなら、そこに移り住むようになればよいですし、そうすることをみんなが普通のあたりまえのこととして受け止め、受け入れた地域でも、特別視せず新しい仲間と促えるような社会になれば、地方創生が日本社会の中にしっかりと根づいていくのではないのでしょうか。

いるな地域にばらけていってほしいですね。ただ、ばらけたとして、そこでどのような種がまかれ、どういうものが芽を出して花がつかを、あらかじめ想定しすぎてはだめです。自然にそれぞれの地域に合う種から芽が出る、というスタンスでいることが大事でしょう。

あと、今の若い人たちには大きなポテンシャルがあるのに、残念ながら、それを伸ばす機会を与えられている人が少ないと思います。彼らのポテンシャルを伸ばすためには、多様な暮らし方や生き方をしていいる人たちに接触する機会をもつと積極的に増やす必要がある。私の場合、農村でゼミ合宿をして、過疎化が進んでいる村の家を訪ねてインタビューするといった、学生主導での幸せ調査などを行っています。

**豊田** 一方、女性についても、よく「女性の社会進出」と言われますが、なっているといます。そのときに、どういうことをひとつの手がかりに考えていけばいいのでしょうか。  
**草郷** 軸は千差万別であることと、多次元で考えることが極めて重要だと思っています。けれども、どんな社会であつても絶対に欠かせない要素があるのも事実。例えば、「この地域では教育は不要」と言われたら、学校に力を入れなくていいと思いますか。「この地域では、とにかく乱暴に生きてもいい、人生は太く短く。だから病気になったら野放し、医師・医療は関係ない」。これも、あり得ないですよ。教育、健康、ある程度の経済基盤、生活のインフラなど、どの地域社会にあつても、よりよく生きるために不可欠な要素が何なのかを見極め、そこから先、地域が個性を発揮して地域づくりをしていくべきです。

## 豊田 尚吾

とよたしやうご／ノートルダム清心女子大学人間生活学部教授。大阪ガス(株)入社後、コロンビア大学東アジア研究所フェロー、学習院大学特別客員教授、エネルギー文化研究所研究員などを経て2015年より現職。著作に「生活意識から見る男女の違いと主観的幸福度」(二季刊 個人金融「ゆうちよ財団」)など。

国連の幸せ指標の取り組みやプーランのGNH(国民総幸福)などでは、社会の中で重要といえる要素は何かを示しています。面白いことに、双方よく似ていて、次の4点が共通しています。1. 公正な経済社会 2. 持続的な環境 3. 政治参加——みんなが発言でき意見を述べられるという意味での政治参加 4.

文化。こうした要素を各地域レベルに落とし込んで、地域単位で何が大きかを整理してみるのも、ひとつの方法です。  
**ローカライズ**——地域自治が進むような形で地域・地方の発展・創生が起きればいいと思います。市民ひとりひとりがアイデアを持ち寄って、みんなでこれからの社会のあり方を考えていけば、住民同士のコミュニケーションがより活発になる。それゆえ個人の幸福感や地域の「幸せの指標」づくりは大事なのです。

**豊田** 研究も大切ですが、実践も重視すべきですね。本日はありがとうございました。